

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 範 麗雅

本論文「南京国民政府の文化外交と『中国評論週報』グループ知識人の英文執筆活動：「ロンドンにおける中国芸術国際展覧会」（1935-36）の開催をめぐって」は、1935～36年にロンドンで開催された「中国芸術国際展覧会」（以下「ロンドン展」と称する）をめぐり政治的・文化的背景を明らかにし、それが中国芸術への新たな国際的関心の高まりと中国文明理解を促す著述の出版ブームをもたらしたことを、英語・中国語・日本語にまたがる多くの文献資料にもとづき論じたものである。筆者がとりわけ注目するのは、中華民国南京政府が国際的地位の向上を目的として打ち出した一連の文化外交政策であり、ロンドン展の開催に前後して出版された中国人作家による多くの中国芸術・文明論の著述である。

本論文は、第Ⅰ部「「ロンドン」展の開催と日・欧知識人の中国芸術文化に関する言説」、第Ⅱ部「「ロンドン展」の開催と近代中国知識人」、第Ⅲ部「林語堂の「中国」とパール・バック夫妻」の三部、全10章から構成され、序章・終章をあわせた全12章の文字数は約876,000字（A4判562頁。原稿用紙400字詰め換算で約2,190枚）になる。このほかに「主要参考文献」が34頁あり、附録として「資料集」22頁、「図版集」44頁、「図版典拠一覧」15頁、「「ロンドン展」開催中に行われた講演会」6頁、「渡米前の林語堂英文著述一覧表」12頁、「渡米前の林語堂の講演一覧表」2頁、を収める。

以下、本論の内容を章ごとに概観する。

第Ⅰ部では、ロンドン展の舞台となったイギリスの東洋学界や文学界・芸術界の動向が、主に20世紀初期に刊行された欧米人や日本人学者による著述をもとに考察される。第1章「「ロンドン展」と日・欧米の芸術界・メディア界・東洋学界」は、ロンドン展の開催を契機に欧米の東洋学界や芸術界で、中国の伝統芸術・文化に対する関心や評価がいかに高まったかを、イギリスの主要な新聞記事や雑誌論文を通して明らかにする。著者は、ロンドン展開催まで、イギリス人による中国芸術品の蒐集・展示・研究には、日本人の価値観や美意識が強く作用し、中国本国における作品評価とは多くの相違点があったという。続く第2章「ローレンス・ビニヨンとアーサー・ウェイリー——「ロンドン展」開催前後の講演・著述活動を中心に」と第3章「「西洋の眼」と「日本の眼」——ビニヨンの中国絵

画理解と日本」では、ロンドン展の表舞台で活躍した詩人・芸術評論家ローレンス・ビニヨン(Laurence Binyon)と、同展を裏で支えた東洋古典の翻訳家アーサー・ウェイリー(Arthur Waley)の評論や翻訳作品に照明をあて、彼らの中国芸術・文化論の形成に「日本の眼」が決定的な影響を及ぼしたことを指摘する。

第Ⅱ部では、中国の外交官や劇作家・芸術家の視点から、ロンドン展開催の歴史的・文化的意義が検証される。第4章「「ロンドン展」と英国滞在中の中国人外交官——郭泰祺と鄭天錫」は、二人の駐英中国大使を取り上げ、彼らの積極的な外交活動が本国政府の対外文化政策の一環となって、ロンドン展の成功を導いたことを跡づける。また第5章「「ロンドン展」とイギリスで活躍する中国文化人——劇作家熊式一と書画家蔣彝」は、イギリス滞在中にロンドン展を体験した中国人劇作家や画家による一連の文学・芸術活動について、関係者の回想録や当時の新聞記事をもとにして、ロンドン展との関わりを軸に現地での反響を具体的に考察する。ここで筆者が注目する媒体が、中国で刊行された英文誌『中国評論週報』(The China Critic)と『天下』(T'ian Hsia Monthly)の二誌である。第6章「「ロンドン展」と国内の知識界——孫科、蔡元培と『中国評論週報』グループ」は、ロンドン展の中国側立役者である蔡元培や孫科の動向に着目し、彼らの活動を側面から支えた『中国評論週報』グループ知識人による執筆活動の意義を論じる。

第Ⅲ部では、『中国評論週報』グループの中心人物であった林語堂がロンドン展開催後に展開した創作・評論活動が取り上げられる。第7章「渡米前の林語堂とバック夫妻——『中国評論週報』での交流と『吾国与吾民』の出版」は、渡米前の林の『中国評論週報』での執筆活動やパール・バック(Pearl Buck)との出会いが、「文明化された中国像」を描く *My Country and My People* (『吾国与吾民』)の出版を導くなど、後に彼が英語圏で作家として名を成す上での基盤を形成したことを明らかにする。第8章「渡米後の林語堂とバック夫妻——『アジア』、ジョン・ディ社、「東西協会」との関わり」は、渡米後の林語堂がバック夫妻の主宰するさまざまな文化的・社会的な活動に参加し、またそれが *The Importance of Living* (『生活の芸術』)などベストセラーの出版につながっていった経緯を論じる。さらに第9章「著述に表れた性霊・ユーモア・閑適——『生活の芸術』を中心に」では、林に世界的名声をもたらした *The Importance of Living* に対する欧米世界での代表的な書評を読み解きながら、第二次世界大戦中に英語圏の読者がこの書物を歓迎した理由とその背景を探る。第10章「『北京好日』に描かれた「中国」」は、林の長編英語小説 *Moment in Peking* (『北京好日』)を取り上げ、彼がいかにして中国文明の全体像を小説特有の手法に拠りながら、絵巻物のように欧米の読者に提示したのかを検証する。そして終章では、研究の意義と課題が述べられ、論文の結びとなる。

以上のような構成と内容をそなえる本論文に対し、審査委員会はロンドン展開催につい

での外交史・学芸史・文学史・美術史にまたがる総合的研究としてきわめて高い水準に達していることを確認した上で、特に次のように論文の意義を高く評価した。

まず、文化外交の視点から、ロンドン展の開催が中英両国の多くの外交官や文化人・知識人の協力により実現に至った経緯を実証的に解明したことである。従来の歴史研究では、近代中国における文化財の保護や展示をめぐる政策や制度の研究はなされてきたものの、欧米における中国美術史研究の文脈を踏まえて、この時期の中国の文化外交を定位する視点は欠けていた。また、中国語・英語・日本語の膨大な各種文献を渉猟して、ロンドン展開催の意義を明らかにする研究もほとんどなかった。本研究はまさしくそうした欠落を補うものであり、ロンドン展開催の背景には緊迫する日中関係という政治的背景があり、南京政府が局面打開の文化外交の一環としてロンドン展開催を積極的に位置づけていたと指摘する。こうした事実発見により、中外文化交流史や中華民国史の研究に大きな貢献を果たしたものと評価できる。

第二に、20世紀前半の欧米における中国古典書画の受容には、日本の価値観や美意識の影響があり、ロンドン展開催を契機に、作品評価の基軸に「中国の眼」が反映されるようになるプロセスを、ビニヨンやウェイリーの著訳や林語堂の作品などを通じて、具体的に明らかにしたことである。中国近代の西洋文化の受容に関しては、近年、日本経由の学知や制度の影響が強調される傾向にあるが、本論文はむしろ西洋文化の洗礼をうけながら西洋に対して日本文化の発信を行った岡倉天心や瀧精一らの著述が、欧米知識人のみならず中国の同時代知識人の東洋文化理解に大きく貢献したという重要な事実を明らかにしている。日中間の文化交流史からだけでは見えない、より立体的で横断的な文化受容の実態を解明したことは、中国美術史研究の水準を一段高める大きな貢献であると言える。

第三に、林語堂、熊式一、蔣彝らの著述・芸術活動の重要な媒体となった『中国評論週報』や『天下』について、ロンドン展との関わりで、中国近代文化の形成に果たした重要な役割を解明したことである。先行する個別の作家論の中で、これらの雑誌を取り上げる研究がなかったわけではないが、本論文は欧米人が中国の思想・文化への理解を深め、中国書画を芸術品（fine arts）として評価するようになるには、自国の伝統を英語で語り解釈する『中国評論週報』グループ知識人の存在が不可欠であったことを、具体的な作品論や翻訳活動にそくして解明した。雑誌というメディアを舞台に、英語により自国文化の対外発信を行った彼らの執筆活動が、ロンドン展の開催時期のみならず、今日にいたるまで英語圏の中国文明理解に一つの範型を提供し続けているという点からして、本論文は広くて長い射程をもつすぐれた研究であると評せる。

しかし、このように高い水準の研究を達成した本論文にも問題点がないわけではない。審査委員会では、論文中に先人の「誤った」作品評価だとか中国美術に対する「誤解」といっ

た表現が見られるが、個々の論の欠点や限界をあげつらうのではなく、むしろ「正しい」理解や評価の根拠こそが、文中において問われるべきではなかったかという疑問が呈された。また、第三部のキーワードとなる“Art of Living”の語の解釈や「写意」の英訳が当時の文脈でどう解釈され表現されたのかなど、英語・漢語間の翻訳実践のあり方について、より繊細な考察を進めるべきであった、との指摘がなされた。さらに、ロマン主義文学の流れに対する理解不足や英語原文の引用・翻訳の瑕疵に対して、より周到的な心配りが望まれるとの注文も出た。中国の文人画における詩文と絵画の関係性についても、ヨーロッパとの対比で、より深い考察ができたのではないかとの意見も出された。とはいえ、以上述べたような批判は、本論文の学術的な価値を大きく損なうものではなく、多くの問題はむしろ本研究によって新たに視界に浮上した課題というべきものである。

総括するに、本論文の達成が中国美術史、比較文学・比較文化論、中国近現代史の分野に大きな貢献をもたらしたことは疑いない。したがって、本審査委員会は一致して博士(学術)の学位を授与するのにふさわしい論文と認定した。